

令和6年度 学校評価報告書1 (計画段階 ・ 実施段階)

学校名	福岡市立福岡高等学校		学校経営方針・学校教育方針	今年度の重点目標	評価(総合)	
校長	ふりがな	とう きくえ	志を持ち、自らの目標を達成しようとする生徒と、意欲的・建設的に学校運営に参画する教職員の協働により、「熱・意気・力」の校訓を具現化した持続可能な学校をつくる。 そのために、すべての教職員が元気で生徒が安心して学べ、成長できる学習環境づくりと学力向上による進路実現をめざし、生徒に誇りと自信を持たせる教育活動を実践する。 また、市民からの期待と信頼をさらに高めるために、福留改革を推進し、本校の新たな歴史を切り開く学校づくりを進める。	1. 組織的な学校運営と危機管理の徹底 「すべては生徒のために」を常に意識し、主任主事を中心に教職員のもっている力を結集して、各部・各教科等が連携し、組織的に生徒の指導や校務運営にあたることに、日常的に危機意識をもち、起こらうことを想定しながら教育活動を行う。 2. 福留改革サードステージ第2章の推進と学校改革委員会の活性化 キーワード「総合学科」「伝統×時代」「授業改善×アントレプレナーシップ教育」のもと、昨年度決定事項を着実に実行するとともに、前例にこだわらない新たな発想と自由な発想で、学校行事や入試などを含めた学校課題を解決し、改革を推進する。 3. アントレプレナーシップ教育の推進 「産業社会と人間」「総合的な探究の時間(デザイン思考)」及び「ジュニア・アチーブメント・プログラム(ジョブシャドウ・SCP・ミーサ)」等、全教職員で組織的に取り組んできた福留キャリア教育に加え、様々な経験・体験を提供することで新たな学びを促し、福留アントレプレナーシップ教育を確立させる。また、社会のDX化にも柔軟に対応できるようなデジタル人材を育てていく。 4. 希望進路の実現と年内入試への取組の充実 総合学科の学びを活かしながら、個々の進路に応じた学力の定着を図る。そのためには、指導と評価の一体化を図り、より良い観点別評価の在り方について、模索する。また、年内入試を挑戦のための入試と捉え、安易な受験とならないよう指導するとともに、必要な環境を整えていく。その方法として、年内入試で活用できる資格取得、小論文、口頭試問などの対策についてブラッシュアップしていく。 5. 部活動の活性化	学校自己評価	学校関係者評価
校長	氏名	藤 菊英				
校長	氏名	川口 三代次				
学校関係者評価委員会委員長	ふりがな	かわぐち みよじ				

昨年度の成果と課題 【成果】キャリア教育の充実を図るために外部人材を活用したり、希望者を中心とした校外研修を実施したりすることができた。「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」をはじめ各教科においても生徒のICT活用力が向上しており、プレゼンテーション力の向上が見られる。
【課題】大学入試の在り方が年々大きく変化してきており、それについての教員研修や保護者への情報発信を一層充実させる必要がある。

評価項目	目標及び具体的な方策等		学校自己評価	取組状況・成果・課題	学校関係者評価	学校関係者評価委員会からの意見等	今後に向けての方針・改善点
	目標	具体的な方策					
教育課程・学習指導	自ら考え、自ら学ぶ姿勢を持つ生徒を育成する授業実践を図る。	授業研修などを通じ、同じ教科だけでなく、他の教科の授業を参考にしながら、教員の授業改善を促す。 観点別評価に対する教員の理解をすすめ、より生徒の主体的な学習につながる授業実践に向けて助言する。					
	入試方法を改善して、本校の発展につながる生徒の確保を目指す。	特色化選抜入学者を領域毎で検証し、入試方法や入学後の指導を改善する。 特色化選抜入学者が抱える学校生活での課題を検証し、入学後のミスマッチがなくなるよう工夫する。					
	規範意識の高い生徒を育て、18歳から成人になる意識を持たせる。	自転車通学者に対し、登下校、駐輪、交通マナー指導を定期的に行い、主体的に行動できるようにさせる。 その場に応じた挨拶や状況に応じた適切な行動を身につけさせ、学校外でも地域の方々に愛される態度を育成する。 定例的「いじめ防止対策委員会」とその事務局(週1回)において、未然防止、早期発見、早期解決等にあたる。 ネットによる被害者・加害者にならぬよう、情報端末機器を適切に扱う力を身につけさせ、互いに認め、支えあう人間関係づくりを推進する。					
進路指導	生徒一人一人の進路保障を目指し、適切な指導・助言を行う。	生徒の進路保障のための課外や補習を計画し、生徒が入試に対応できる学力を身に付けさせる。 共通テスト・小論文などの進路ガイダンスを計画的に実施したり、校内向けの進路指導研修会を適切に実施する。					
	生徒・教師・保護者間の連携の充実を図る。	職員に向けた研修会や保護者向けの説明会を通して、適切な情報提供を行い、生徒の進路実現に有益な情報を提供する。 スタディサプリを活用し保護者向けの情報発信の方法を確立し、運用することで生徒の進路実現につなげる。					
学校改革	サードステージ第3章の取組として、キャリア教育・授業や行事・部活動活性化をより充実させ、特色ある取組を積極的に発信する。	進学支援プログラム(特別文理・スポーツ文化・グローバル経営)や短期研修(関西機関大研修・海外異文化体験研修など)などにより実社会で活躍できる人材の育成を推進し、その取り組みを積極的に発信する。 改革検討委員会や学校改革の方策について議論し、学校全体で改善を図る機運の醸成を図る。					
	ジュニアアチーブメントプログラムなどキャリア教育や文部科学省の事業であるDXハイスクールの取組を推進するとともに、学校行事や授業などにおいても改善を図る。	ICTを効果的に活用し、授業改善や校務の情報化を進める。 学校における取組の目的を整理し、より充実した取組となるようカリキュラムマネジメントを検討していく。					
キャリア教育の充実	アクティブラーナーの育成を図る。	1年次の「産業社会と人間」の授業を通して、目標設定力、コミュニケーション能力、意思決定力の育成を目指す。 「総合的な探究の時間」を通して、2年次では論理的思考力、課題発見解決能力、社会への関心力、3年次では協働力、創造力、考え抜く力の育成を目指す。					
	学習活動を通じて基礎的・汎用的能力の育成を図る。	キャリア教育行事を通じて人間関係形成・社会形成能力やキャリア形成能力の向上を図る。 キャリアパスポートなどの教材を通じて自己理解・自己管理能力や課題対応能力を身に付けさせる。					

※ 学校自己評価は、5段階評価(A…目標を大幅に上回る達成度、B…目標を上回る達成度、C…目標どりの達成度、D…目標を下回る達成度、E…目標を大幅に下回る達成度)で成果や取り組み状況等について記入すること。
※ 学校関係者評価は、学校自己評価について5段階評価(A～E)で評価すること。